

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

スケートと学業は、人生の両輪



来シーズンの更なる飛躍を誓う

◎文学部4年次生
町田 樹 さん

ソチオリンピック5位。世界選手権銀メダル。大きな飛躍を遂げた2013-14シーズンの演技が記憶に新しい中、町田樹さんは更なる高みを目指し、来シーズンに向けて準備を始めている。その一方で、一大学生として学業にも手を抜かず取り組む。スケートと学業について、彼はどのようにとらえているのだろうか。

春から夏にかけて、トップスケーター達は新しいプログラム作りなど来シーズンに向けた準備や各地で開催されるアイスショーで忙しい。町田さんも7月に渡米し、ショートプログラムをほぼ完成させた。アイスショーでは、自ら振り付けを考えたエキシビションでシャンソンの名曲『Je te veux』を披露し喝采を浴びた。スケーターとしての活動と同時に、彼は大学生としての時間に多くを割いている。

2008年、関西大学文学部に入学。アメリカを練習拠点としていた休学期間を挟み、今年度、大学生として最後の年を迎える。遠征がなければ、朝6時から高石市の臨海スポーツセンターで練習し、週2回千里山キャンパスで授業を受け、夜7時から再び練習。空いた時間は大学の図書館や自宅で卒業論文の執筆に取り組むという日々を過ごしている。

「大学では身体を休めて勉強、リンクでは勉強の頭を休めて身体を動かす。オン・オフのスイッチが切り替わって、身体にも脳にも良いリフレッシュになっています。練習だけだったら、空いた時間もフィギュアスケートのことばかり考えて疲れてしまいます」

卒業論文は1月の提出まで余裕があるが、シーズンが始まる10月からは、勉強の時間が取れなくなることを見越し、「この夏が勝負」と取り組んでいる。テーマは明かさなかったが、「これからの人生でやりたいことに関わる調査なのでとても楽しい。卒業するために提出するのではなく、この論



町田 樹—まちだ たつき
■1990年神奈川県生まれ。小学4年生で広島県に転居。倉敷聖松高等学校卒。文学部4年次生。体育会アイススケート部所属。3歳からスケートを始める。2007年全日本ジュニア選手権優勝。2012-13シーズン、グランプリシリーズ中国杯優勝、グランプリファイナル初出場。2013-14シーズン、ソチオリンピック5位、ISU世界フィギュアスケート選手権2位。

文を書いた自分を誇りに思えるくらい、しっかりしたものを仕上げたい」と語った。アスリートであることと大学生であることが、良い影響を及ぼし合い、彼の人生の歩みを力強いものにしていく。

「フィギュアスケートが上達すれば、他のことはどうでもいいと考えた過去もありました。高校卒業に際して、進路について考えたとき、自分からフィギュアスケートを抜いたら何も残らない“ほとんどゼロ”だという事実が気になって悲しくなりました。自分の人生を、スポーツだけに頼ってはいけなと思っています。大学に入学してからは、“ほとんどゼロ”の部分だけをどれだけ大きくできるか意識しながら学生生活を送ってきました。

心・技・体がバランスよくマッチし始めたことが、この1年の好成績につながったと感じています。それはフィギュアスケートだけで成し得ることはできません。学生生活から得たことが大きかったと思います。関係のないように見えることでも、無駄なことは1つもありません。すべてがつながっていると思って毎日を過ごすようにしています」

大きな飛躍を果たしたシーズンを終え、今、町田さんに対する注目も期待も以前とは比べられないほど大きくなっている。「期待に応えられる演技をしたい。プレッシャーはありますが、1舞台1舞台を誠心誠意、観客に届けること。自分らしく演じることに集中すれば、結果はおのずとついてくると信じています」と意気込む。注目の町田さんの来シーズン初戦は、10月に行われるグランプリシリーズ第1戦スケートアメリカだ。



猛虎の未来を支える 有望選手獲得のために

学生時代のマネージャー経験が今、役立つ

◎阪神タイガーススカウトディレクター
竹内 孝行 さん —社会学部 1994年卒業—

新人ながら一軍で活躍中の梅野隆太郎捕手らの交渉権を阪神タイガースが獲得したプロ野球ドラフト会議2013。阪神タイガースの席には監督、ゼネラルマネージャーなどと並んで竹内孝行さんの姿があった。彼は未来のスターを獲得するために働くスカウトディレクターだ。



阪神タイガースのスカウト部門は12人。全国各地のアマチュア選手の情報を収集し、有望選手をリストアップするスカウト10人と部長、スカウトディレクターの竹内さんと構成されている。全球団の中でもこれだけの人数のスカウトを抱える球団はない。「生え抜きの選手が将来チームの屋台骨となり、グラウンドで大暴れしてほしい。ファンの皆さんもそれを望んでいると思います」と竹内さんはタイガースがスカウトに力を入れる理由を説明する。

スカウトの1年間は、10月下旬に行われるドラフト会議を中心に回っている。3月から高校、大学、社会人の地方予選やリーグ戦、全国大会を追いかけ、10月に入ると指名候補の選定に入る。毎年ドラフト会議で指名される選手は12球団で60～70人だが、事前にリストアップされる数は200～300人に上る。それだけの数の選手の特徴を頭に入れ、各地域を担当するスカウトからの情報を元に上層部への報告をまとめるのも竹内さんの仕事。時には自ら資料映像を編集することもある。

就職当初は親会社の阪神電鉄に入社。2001年に球団本部に異動。8年間の広報担当などを経て、2012年からスカウトディレクターとなった。

両親の影響で物心が付いたころから阪神ファンだった竹内さんは、小学3年生の時に地元の少年チームで野球を始めた。憧れていた掛布雅之選手の背番号31のTシャツを着て登校したこともあった。関大一高でももちろん野球部に入った。しかし、1年生の時にスライディングでひざを痛め、その後、リハビリを続けながら練習を重ねたが完全な回復には至らず、3年の最後の夏もベンチに入れなかった。関西大学に進んだ時には、野球はもうやめようかと迷っていたが、高校時代のチームメイトに誘われてマネージャーとして入部。2年次生から卒業までは、関西学生野球連盟の学生委員として、リーグ戦の運営や球場、用具、審判などの手配、パンフレットの製作、広告の依頼など、裏方の仕事に奔走した。

「マネージャー経験がなければ今の自分はありません。マネージャーは物事を滞りなく進めて当たり前。できなければ叱責されます。予想される事態を何通りも想定して、先々の段取りを常に考えることを鍛えられました」

大学時代に鍛えられた段取り力が最大限に発揮されたのが、2005年にタイガースが甲子園でリーグ優勝を決めた時だ。優勝決定から胴上げ、祝勝会、記者会見、さらに殺到するメディアへの対応は深夜0時を過ぎても続いたが、当時、球団広報だった竹内さんが中心となって現場を取り仕切り、最後までやり遂げることができた。

スカウトの仕事は一人の若者の人生を大きく左右する仕事でもある。その重みを知る竹内さんは、機会をとらえては阪神鳴尾浜球場のファーム(二軍)の試合などに足を運ぶなどして、獲得に関わった選手を励まし続けている。

「プロになってうまくいく選手ばかりではありません。結果が出なければ終わり。全員がレギュラーで活躍し、ハッピーになれるわけではないのがこの世界です。すべてが選手自身の取り組み次第。自分を見つめ、自分の弱点や長所を知り、長所を伸ばし弱点を克服する努力をしてほしいと思いつつながら声を掛けています」

スカウトを担当するようになって3年目。1年目には藤浪晋太郎投手の獲得に成功するなど、仕事は順調だ。竹内さんの仕事が順調ということは、タイガースは今、着実に強くなっている。これからの猛虎の躍進に期待が膨らむ。

竹内 孝行—たけうち たかゆき
■株式会社阪神タイガース球団本部次長、アマスカウト担当ディレクター。1971(昭和46)年兵庫県生まれ。90年関西大学第一高等学校卒。94年関西大学社会学部を卒業。同年4月阪神電気鉄道株式会社入社。子会社のケーブルテレビの営業職などを経験。2001年阪神タイガースに転向、04年より球団広報として働く。12年より現職。